

《書評》

久保朝孝著 『古典解釈の愉悅―平安朝文学論攷』

緑川 真知子

「古典の読みの不断の更新は現代に生きる我々の使命である、との自負に貫かれた著。紫式部集の難解歌解釈にはその通りだと思える指摘が。先入観・通説に惑わされず、表現・作品そのものに向き合わなくてはならないと教えられる」と、本書の「はしがき」の久保氏の言葉を承けながら、その読後感を述べていたのは氏の後輩の一人であるが、この一言に本書の特徴は凝縮されていると言っても良いであろう。還暦を記念しての一冊だという本書は、『紫式部日記』を専門とする久保氏が、三〇余年の研究生活において、敢えて専門として中心となる論文以外のものを集めて纏めたものであり、題して『古典解釈の愉悅』とある。その表題の洗練と、落ち着いた意匠が施された白地の表紙から、すでに本書の持つ性格が透けて見えてくるようである。これからこの書物をひもとく者を受け入れて、解釈という愉悅を共有するのだという、古典を軸とした知の戯れを予感させる。まず本書の目次を挙げておくが、「本編」と「付編」の二部構成になっている。

【本編】第一章 伊勢物語の悲恋、第二章 伊勢物語の殉愛、第三章 うつほ物語の方法、第四章 源氏物語の女房（断章）、第五章 源氏物語の和歌（断章）、第六章 紫式部集の「箏の琴しばし」考、第七章 紫式部集「明け暗れのそらおぼれ」考、第八章 紫式部集の「山里のみみぢ葉」考、第九章 紫式部集の〈文散らし〉考、第十章 紫式部集「たたく水鶏」考、第十一章 紫式部集の〈卷末歌三首〉考、第十二章 更級日記の夢、第十三章 更級日記の薬師仏、第十四章

讀岐典侍日記の方法。

【付編】第一章 紫式部日記〈斷想〉、第二章 源氏物語〈斷想〉、第三章 女流作家の肖像①―和泉式部、第四章 女流作家の肖像②―紫式部、第五章 紫式部伝記研究の現在、第六章 源氏物語統編作者異聞、第七章 平安文学に見る死の言葉、第八章 女流日記文学研究の課題、第九章 葉月物語絵巻解題。

初出・原題一覧、あとがき、索引。

「本編」にはより専門性の高い論が並び、「付編」はもう少し雑多な随筆的とも呼べるカテゴリーの論を包摂している。この二つの弁別には、久保氏の研究者としての清廉な人柄が垣間見える。「本編」は、時代を追って読んでいけるように論文の配列がなされており、その点読む者にとってやさしい。

同じ研究者として、本書を手にして何よりもまず、思うことは、研究者がある時点で己の仕事を振り返り、様々な論を一冊に纏める時に、何をどのように纏めなければならないのか、そういうことを教えてくれる一書であるということである。研究者にとって、おそらく最も大切なことは、言うまでもなく自己の研究の研鑽を積むことであるが、またそれと同じく、らに重要なことは、己の研究を活字媒体によつて発表するということであろうと考える。大変優れた研究者の中には、活字媒体を残すことにあまり熱心ではない人が時折いる。これはおそらくはその研究者があまりに完全主義にすぎて、己の研究を完璧な形においてしか発表したくないという場合が多い。リベラルアーツという研究分野においても、新しい発見や自己の研究の進展は常にあり、終わりが見えないことも良くある。しかし、どこかの時点で、己の仕事に区切りを付け発表するのも、または過去の仕事として埋もれてしまったような論文も掘り起こして人々の目にさらすというの、研究者の仕事の一部だろうと考える。そういうことを考える時に、本書は、どのような形で世間に出すべきかという一例を實現してくれていて、その意味においてまさに成功を収めていると見受けられるのである。

「本論」は『伊勢物語』論から始まっている。しかし、久保氏は『伊勢物語』関連論文をただ並べるのではなく、『伊勢

物語」が古典文学として持つ問題―それぞれが歌物語として完結している短篇か、昔男の一代記としての長編か、そして虚構か史実か―という大命題に対して、取えて虚構の短編という視点からの読みの可能性を呈示する。第二章においては「みやび」という、きわめて定義するのが難しい概念を正面から取り上げるのだが、決して思弁的な論の展開ではなく、男の「身」と「心」のあり方から検証をしており、更には女の「みやび」の完成というところにも目を向け、それを「みやび返し」と読むあたりは、斬新な面白さに思わず惹きつけられる。流れるような文体がまた論旨と相まって、まさに「解釈の愉悅」を体現するかのようであり、『伊勢物語』論はオープニングに相応しい。

『伊勢物語』の論で短篇の世界を巡った後、続く第三章では長編の『うつほ物語』が取り上げられている。しかも、『うつほ物語』を長編として存在せしめている「遡及付加による物語展開方法」という、前のことを繰り返す中に新しい事実を付加して物語を展開していくという物語の方法について、具体例を示しながら論じている。これは一九八〇年初出の論文であり、久保氏院生時代の論文である。一般にはなかなか手にすることのできない、研究室が中心となって発行していた『中古文学論攷』という雑誌に掲載されたものである。この「論攷」の「攷」の文字を本書の副題にも使っており、その旨、「あとがき」に記されているが、こういう記念碑的な論が加えられているということが、この論集の価値を高めていると同時に久保氏にとっても意義深いことではなからうか。若い時代になした論を載せるには、ある種の躊躇などがあるやもしれない。ただ狙ったわけではないだろうが、第一、第二章の『伊勢物語』論の短篇文学としての論と、続く長編文学の論としての第三章として、あたかも上手く対をなしているかのような点など、心憎い構成となっており、古い論でありながら、論集の中で自然な位置を保っている。

第四、第五章は共に『源氏物語』論であるが、著者は副題にわざわざ〈断章〉と断る。このような律儀な部分に久保氏の気配りが感じ取られる。第五章においては、宇治十帖の主人公薫という人物を、中の君との和歌贈答の分析を通して浮き彫りにしており、説得力のあるものである。

「本論」において最も読み応えがあるのが、第六章から第十一章までの『紫式部集』における和歌の考察であろう。それぞれの論は歌番号の順に並べられ、どれも注釈史が丁寧な押しえられており、最後には、問題点ないしは新解釈が示されている。久保氏は『紫式部集』の注釈の歴史が浅いうえ、紫式部の伝記的な資料として読まれるようになった歴史も浅いことを指摘し、それ故に歌の解釈には揺れが生じる可能性があると言いつつ、それを具体的な歌の解釈を通して示す。これは著者の言う通りであろう。ただ惜しむらくはここまで丁寧な分析をそれぞれの歌について行っているのなら、かえってその範囲を拡げて『紫式部集』全体とは言わないまでも、もう少し多くの歌を対象にしていただけならと思わなくはない。ただそうすると論集全体のバランスを崩してしまう可能性はあるのだが。しかしまた、完全に逆のことも望みたくなるのである。というのは、第六章最後において、紫式部について著者は「宣孝以外には男関係を認めない前提から、もうそろそろ自由になりたいのである」と書き、第七章においては、紫式部の男性初体験にからむとおぼしき贈答の綿密な分析を行い、その相手が夫となった宣孝であったのかどうかについては問題ではないとし、紫式部は『伊勢物語』の歌を踏まえながら虚構化しているのだとする。事実を核に、虚構の世界が創り上げられる様子が明らかにされ、『源氏物語』作者の創作過程へも肉薄しようかという勢いを持つ。本書において、この第七章は圧倒的な力を持って読む者に迫ってくる部分であるが、ある意味このあたりの一連の『紫式部集』の論を、この第七章を核に、著者の筆力を持って、研究史を丁寧に踏まえていくという殻を破り、研究論考の枠も越えてしまうような一文にしたため直してくれても良かったかもしれない、などと贅沢な思いを抱いてしまう。おそらく久保氏はそういうことができる方であろうと思う。

続く『更級日記』の論も、「前生夢」など興味深いテーマが取り上げられているだけでなく、第十三章の「更級日記の薬師仏」は最後に「あえて憶測をたくましくするなら、十三歳の旅立ちには、同じく第十三願をその呼称の由来とする阿弥陀仏の迎え待ち受ける西方極楽浄土への往生志向を暗示しているとも言えるのではないだろうか」とし、作品初発部に描かれる薬師仏と末尾に描かれる阿弥陀仏に、構造的な意図を積極的に読もうとするあたり、更に深いテーマへと連なる可能

性を秘めている論ではないかと思われる。「本編」は、久保氏の専門と関わる『紫式部集』の論や日記文学関連の論が光彩を放つのは当然ではあるが、全体としてみるなら、平安文学史概説的側面も自ずと備えていると言えよう。

本書の残り三分の一は「付編」として、著者の専門的な関心から無論『紫式部日記』や紫式部その人に関わる論が大半を占めるが、源氏物語の中で「酒」の語が何回出て来るのかなど、普通はあまり目が届かないような事柄に着目した記事が多く、上品な語り口の文体もさることながら、読む者を惹きつける魅力を備えている。近年、研究書と一般書の境目が不鮮明となつていく傾向があると言えるかもしれないが、成功している例は意外に少ない。しかし本書は研究者の欲求も十二分に満たしながら、専門でない者が手にしても知的好奇心を満足させる側面も備えているのである。このバランスを上手く保てる研究者は意外に少ない。そしてわたしが何よりも羨ましく思うのは、久保氏の文体である。研究書であっても優れた文体が望まれるとはいへ、文学的すぎてもいけない。必要にして充分でありながら、美しい文体を持つのが理想であるが、久保氏の文体はまさにそうである。久保氏は俗に傾くことなく、専門書と一般書が融合するような書物をもつたのできる希有な研究者なのである。『紫式部日記』に関わる主要論文がはずされていることから、久保氏の専門に關わるコアな仕事の出現への期待が膨らむという贅沢なオマケさえ付いて、『古典解釈の愉悅』は、研究者として年齢的な節目などに、どのような本をもつべきかという問に見事に答えてくれている。

二〇二一年一月 世界思想社 A5判 三八〇頁 六、〇〇〇円（税別）

（明治学院大学非常勤講師・第十二回紫式部学術賞受賞）